中国の歴史における「三大幹」の地形認識

李　桓*

The "Three Great Trunks" View of Geography in Chinese History

Li Huan

1．はじめに

中国の歴史において，黄河と長江を境目に，大地を「北」，「中」，「南」の三部分に分けて，「三大幹」あるいは「三大幹龍」として捉える地形認識があった。このような捉え方はだいたい宋から明までの間に成熟したと言われ(1)，特に「風水」の分野で応用されてきた。近代的地理学で捉えられたような客観的な地形と違い，このような地形認識から捉えられた山々は互いに一定の順序関係にあり，諸部分は身体のように脈絡の通じ合いが認められる。都市や村落の立地はこのような伝統的な「地理学」の元で，山や水との関係から計画されるケースが多かった。

近代的な科学技術の日進月歩の中で，伝統的な諸学が急速に後退する。その問題点として，伝統文化の中で形成された体系を理解することがますます困難となる上，伝統的な方法に含まれる智恵の部分も発展しないままで，場合によって消失してしまう。冒頭に提起した「三大幹」の地形認識は，伝統的な「地理学」の理論に属し，地形を統一したシステムとして捉えることに特徴がある。それを再考することは，特に地形の特徴を無視できない都市計画や建築学にとって新しい視点の発現につながると考える。

本研究の目的は明代の書物に記述された「三大幹」の地形認識及びその認識から捉えられた主要山脈を明らかにする。今後の風水理論の解明や都市立地論や山水論の研究などに役立てたい。

本研究は明代書物である『三才圖會』(2)，『圖書編』(3) と『地理人子須知』(4) に記述された「総論中国之山」（『圖書編』では「論中国之山」と題す）の内容を翻訳し，そこで論じられた山脈を現代地図の上で対照しながら整理し，歴史的に重要とされた山脈を明確にする。これらの書物には，「三大幹」についての論述は同じ内容の文章が収録されている。文の冒頭にはいずれも「朱子曰」と書かれているため，宋代朱熹の論述が元々存在すると考えられる。なお，朱熹の論述のある元資料は現段階入手していないため，朱子の理論に関する考証は別の研究機会にしたい。

論述と一緒に付されている「三大幹図」は日本における研究に多く引用されてきたが，その図の背後にある理論的な中身については必ずしも十分に考察されていない。本研究はその不足点を補うことにもなると考える。

王圻，王思義父子による『三才圖會』及び章潢の『圖書編』は，図と文を兼ねた特徴をもって，定評のある「類書」である。徐善繼，徐善述兄弟による『地理人子須知』は，風水諸家の理論を融合し，幅広い側面から体系化した風水理論書である。

* 人間環境学部　助教授
2007年3月28日受付

2．祖山としての崑崙山

「総論中国之山」は最初に，「崑崙山」について述べている。次のような内容である（図1）。

朱子曰く，『河圖』[①] は崑崙が地の中心であるという。中国から「于闐」[②] まではおよそ二万里ある。「于闐」の使者が来貢のときには，西へ四千三百里余りは崑崙山であると言った。中国は崑崙山の東南部にある。天下（中国の大地）の山々は崑崙山を祖とする。

注：
①『河圖』：讖緯書。西漢時代に書かれたと言われる。②于闐：古代西域にあった国。現在の新疆ウイグル自治区で，崑崙山麓の和田市のある一帯にあった。

これは中国の山々はすべて崑崙山と関係し，そこから枝分かれした山脈であることを指摘している。

崑崙山は天下の祖であり，地の中心である考え方は中国の歴史において古くからあった。いくつかの代表例を挙げておきたい。『河図括地象』には次のような記述がある。

崑崙山は柱であり，（そこを通して）「気」が昇り天に達する。崑崙山は「地」の中心である。[崑崙山爲柱，氣上通天。崑崙者地之中也。（『太平御覧』「地」）]

晋代張華による『博物志』には次のような記述がある。

大地は崑崙山から始まる。（崑崙山は）広さは縦横万里あり，高さ1万1千里ある。奇妙なものが生まれ，聖人や仙人が集まるところである。[地氏之位起於崑崙，從廣萬里，高萬一千里。神物之所生，聖人仙人之所集。（『太平御覧』[(5)]「地」）]

この両者の記述は神話的な色彩があるが，崑崙山を地の中心とする考えが明らかである。

唐代風水家楊筠松による『撼龍經』[(6)] には次のような記述がある。

崑崙山は天地の骨格のようなもので，巨大な山脈として天地を中心から支える。それは人間の脊柱と首のような役割である。そこから東西南北に枝分かれした4本の聳え立つ山脈が4体の「龍」のように，4つの世界をつくり出している。西北の「崆峒山」からの1本は数万里も伸び，東へ朝鮮半島にも達する。「南龍」という南側に枝分かれした山脈のみが中国に入り，（中国大地の）祖として奇妙に展開する。その大地の中で，黄河が九曲に曲がりくねって大腸のようで，長江が屈曲して（小腸と）膀胱のようである。両者の間に山々が縦横に枝分かれをしながら伸びていき，それらを通して「気血」が（地中に）流れ，水のあるところに集まっているのだ。……[崑崙山（須彌山）是天地骨，中鎮天地爲巨物，如人背脊與項梁，生出四肢龍突兀，四肢分出四世界，南北東西爲四派，西北崆峒数萬程，東入三韓隔杳冥，惟有南龍入中国，胎宗孕祖来奇特，黄河九曲爲大腸，川江屈曲爲膀胱，分肢擘脈縦横去，氣血勾連逢水住。……]

これは地理的に中国と崑崙山との位置関連や国土に流れる主要河川を説明したものだけではなく，大地における山々や河川は生きもののように互相に関連しており，全体的に一つの有機体をなしているという独特な見解をも，比喩的な描写を通して明らかにしたものである。

3．「三大幹図」と山系についての総論

図2は「中国三大幹図」である。「総論中国之山」は「三大幹」については次のように述べている。

……（崑崙山の支脈）のうちの三幹は中国に入っている。他の国に入っている山山については考察ができず，ここでは触れずとする。

中国の山に関しては，「河北諸山」は北の

論中國之山

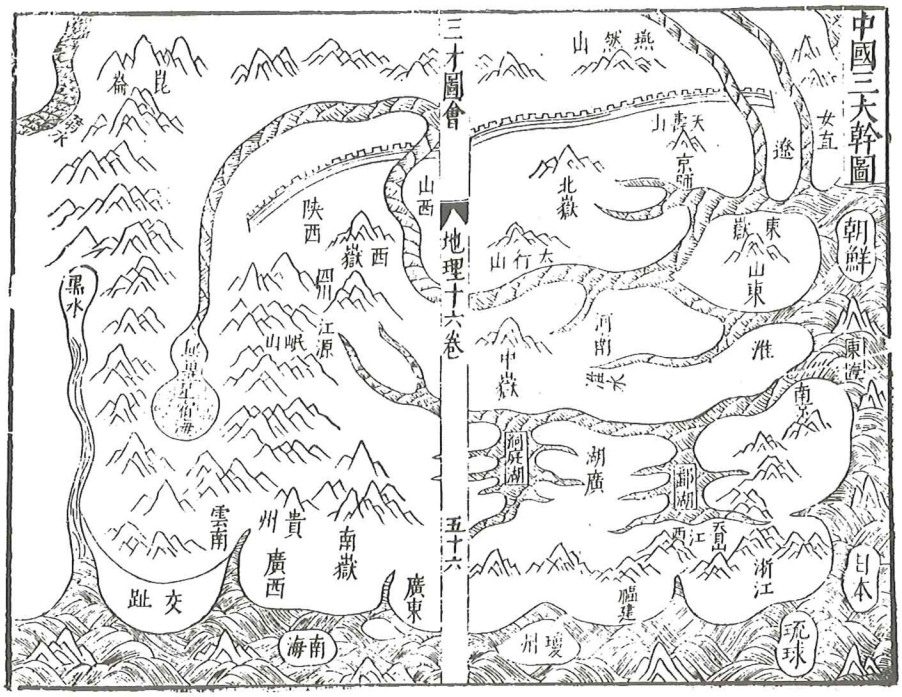
按朱子曰河圖言崑崙為地之中葢中國至于闐音田二萬里于闐遣使來貢自言其西去四千三百餘里即崑崙山今中國在崑崙之東南而天下之山祖於崑崙惟派三幹以入中國其入外國之山無可考亦不足論今以中國之山言之其河北諸山則自代北寰武嵐憲諸州乘高而來山脊以西之水流入龍門西河脊東之水流于幽冀入于東海其西一支為壺口泰嶽次一支包汾晉之源而南出以為析城王屋而又西折為雷首又一支為恒山又一支為大行山大行山一千里其山高甚上黨在山脊河東河北諸州在山支其最長一支為燕山盡於平灤大河以南諸山則關中之山皆自蜀漢而來一支至長安而盡關中一支生下函谷以至嵩少東盡泰山一支自嶓冢漢水之北生下盡揚州江南諸山皆祖於岷江出岷山岷山夾江兩岸而行那邊一支去為江北許多去

處這邊一支分散為湖南閩廣盡於兩浙建康其一支為衡山而盡於洞庭九江之西其一支度桂嶺則包湘源而北經袁筠之地以盡于廬阜其一支自南而東則包彭蠡之原度歙黄山以盡于建康又自天目山分一支盡于浙江西之山皆自五嶺贛上來自南而北閩廣之山自北而南一支則又包浙江之原北首以盡會稽南尾以盡閩粤此中國諸山祖宗支派之大綱也

總論中國之水

按仁山金氏曰天地常形固相為勾連貫通然其條理亦各有脈絡自崑崙而東北言之則自積石而北為湟水星海青海以至浩亹皆河源也入匈奴以東為陰山又東南自代北雲朔分而南趨為北嶽以至大行是為河北之脊壺口雷首大嶽析城王屋皆其羣峰河之折而南汾晉諸水之所以西入河涿易滱漳恒衛之所以東入海也分而東趨者行幽燕之地

図１　総論中国之山
出典：『圖書編』



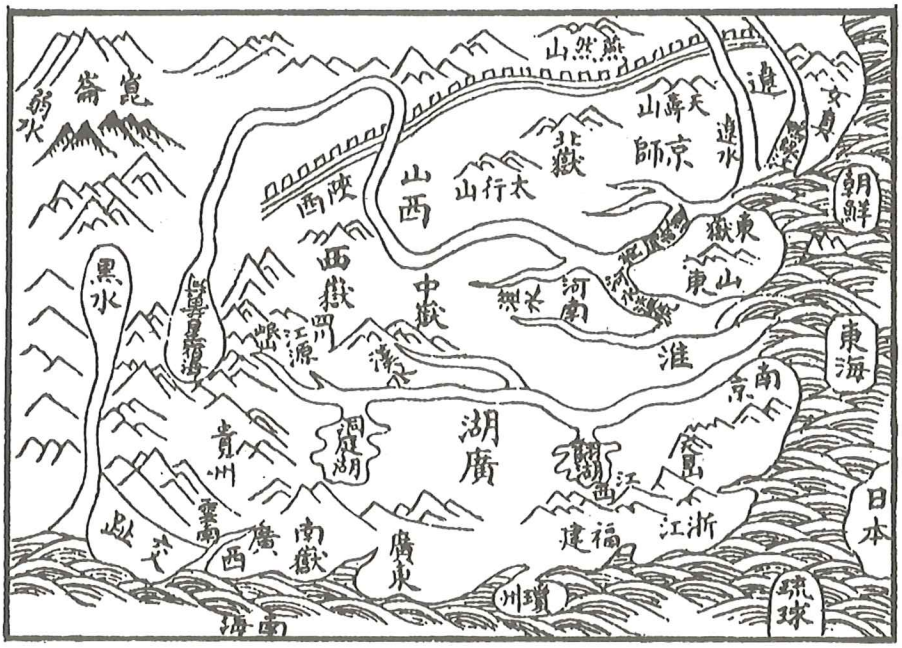


図２ 「中国三大幹図」と「中国三大幹龍総覧之図」
出典：上図は『三才圖會』より，下図は『地理人子須知』より

「寰」①,「武」②,「嵐」③,「憲」④ 諸州のある高所から来ている。山の脊梁以西の水系は「龍門」⑤ と「西河」⑥ に流れる。東側の水系は「幽」⑦,「冀」⑧ 方面へ流れ，最終的には東海に流れ込む。その一支は「壺口」⑨ である。もう一支は「汾」⑩ と「晋」⑪ の平原を囲みながら南へ伸び，「析城山」,「王屋山」となり，さらに西へ曲がって「雷首山」⑫ となる。また一支は「恒山」である。また一支は「太行山」である。「太行山」は長さ千里もあり，高さもかなりある。「上當」⑬ は山の上にあり,「河東」⑭,「河北」の諸州は山麓にある。その最も長い一支は「燕山」で,「灤河」まで伸びる。

注：

①「寰」：歴史における州の名前。五代，後唐，天成元年に設置された。現在の山西省朔州市の東北あたり。②「武」：歴史における州の名前。遼から元まで設置された。現在山西省神池縣の東北あたり。③「嵐」：歴史における州の名前で，西側に「岢嵐山」があるからこの名前を得たと言う。北魏から設置された。現在は山西省嵐縣あたり。④「憲」：歴史における州の名前。現在は山西省原平市あたり。⑤「龍門」：山の名前。現在の陝西省韓城市と山西省河津市の間。⑥「西河」：黄河の上流で，南北方向に流れる部分の旧称。⑦「幽」：古代十二州の一つで，現在の河北省北部と遼寧省一帯。⑧「冀」：古代九州の一つで，現在の山西省，河北省西北部，河南省北部が含まれる。⑨「壺口」：「壺口」は山の名前で，現在の山西省郷寧縣内にある。黄河が北から流れてきて，このあたりで壺から勢い良く流れ落ちるようになるため，この名前が由来したという。⑩「汾」：歴史における州の名前。北魏太和十二年(AD488年)に「州」として設置。明万暦の時「府」に昇格され，1912年に廃止となった。範囲は現在の山西省の汾陽，介休，平遥，孝義，霊石などの縣があるところ。⑪「晋」：歴史における州の名前。現在の山西省の臨汾，霍県，汾西，洪洞，浮山，安澤などの市や県があるところ。歴史的に明礬の産地として有名。⑫「雷首山」：歴史における山の名前。現在の山西省中条山脈の西南端で，黄河と涑水の間にある。場所によっていくつかの異なる名称がある。⑬「上當」：歴史における地名。現在の山西省長治市のある場所。⑭「河東」：歴史における地域。山西省の西境を南北方向で流れ，その東側の地域を指していたが，唐代以降は，山西省の全域を指すようになった。

(「河北諸山」) 以南の諸山はつまり「關中」⑮ の山で，みな「蜀漢」⑯ から来ている。その一支は「長安」⑰にやってきて，「關中」域内で終わる。一支は「函谷」⑱ を形成しながら「嵩少」⑲ に至ってさらに東へ，「泰山」あたりで終わる。もう一支は「嶓塚」⑳ から出発して「漢水」㉑ の北側を通り，「揚州」㉒ あたりで終わる。

注：

⑮「關中」：歴史における地名。現在の陝西省のあるところ。⑯「蜀漢」：歴史における三国の一つ。紀元221年，劉備が成都をその都にした。範囲は現在の四川と雲南両省の大部分，貴州省，陝西省の漢中，甘粛省の白龍江流域の一部などが含まれる。⑰「長安」：歴史における都の名前。建都の時代は前秦，前趙，後秦，西魏，北周，隋，唐などであった。時代によって場所が違うが，大体現在の陝西省西安市の西北あたりである。⑱「函谷」：歴史における関の名前。秦代の函谷は現在の河南省霊宝市の南にある。漢代の函谷は現在の河南省新安県の東北にある。両者は約150㎞離れている。⑲「嵩少」：「嵩山」の別名で，西側に「少室山」があるため，「嵩少」とも呼ばれた。「五岳」の一つとして「中岳」とも称された。河南省登封市の北にある。⑳「嶓塚」：山の名前。「漢水」の源となる山。歴史においては異なる説があったが，陝西省寧強県の北部にある山は「漢水」(東漢水) の源とされた。㉑「漢水」：「漢江」とも呼ばれ，長江の最大の支流である。陝西省南部と湖北省を流れ，武漢市で長江に合流。全長1532㎞。㉒「揚州」：歴史における「州」の名前。時代によって範囲が違うが，漢代をみると，安徽省淮河と江蘇省長江以南の地域，江西，浙江，福建三省，湖北と河南の一部がその領域に入る。

「江南諸山」は「岷江」を源とし，「岷山」から出たものである。「岷山」は長江を挟んで２本に分かれる。北側は長江の北部で伸びていき，多くの分枝がある。南側は「湖南」,「閩」㉓,「廣」㉔ の諸方面へ枝分かれし,「浙」㉕,「建康」㉖ のあたりで終わる。その一支は「衡山」で,「洞庭湖」と「九江」㉗ の西側で終わる。一支は「桂嶺」㉘ を渡ってから，

「湘江」の源を囲みながら北へ，「袁」㉙，「筠」㉚の地を経て，「阜廬」㉛あたりで終わる。また一支は南から北へ，「彭蠡」㉜平原を囲みながら，「歙」㉝の「黄山」を渡り，「建康」あたりで終わる。また，「天目山」から一支が枝分かれして，「浙」で終わる。江西の山々はみな「五嶺」㉞から発し，南から北へという形で伸び，「閩」，「廣」の山々は北から南へという形で伸びる。もう一支は「浙江」平原を囲みながら，北側は頭として「會稽山」あたりで終わり，南側は尻尾として「閩」，「粤」㉟方面で終わる。

以上は中国諸山の元とその支脈の大綱である。

注：

㉓「閩」：福建省。㉔「廣」：広東省。㉕「浙」：浙江省。㉖「建康」：歴史における県の名前。現在の江蘇省南京市のある場所。㉗「九江」：「洞庭湖」に流れる9本の川，つまり沅，漸，元，辰，敘，酉，澧，資，湘を言う。㉘「桂嶺」：山の名前。湖南省臨武県にある。「香花嶺」とも呼ばれる。㉙「袁」：歴史における州の名前。領域内に「袁山」があることから由来した名前。現在の江西省宜春市のあるところ。㉚「筠」：歴史における州の名前。現在の江西省高安市のあるところ。㉛「廬阜」：「廬山」の別の呼び方。江西省九江市南部にある。北側は長江に，東南側は「鄱陽湖」に接する。「匡山」，「匡廬」とも呼ばれ，古くは「南障山」とも呼ばれた。㉜「彭蠡」：「鄱陽湖」の別名。江西省にある。㉝「歙」：歴史における州の名前。安徽省の休寧，歙県，績溪，黟県，祁門，及び江西省の婺源などの地域が含まれていた。㉞「五嶺」：5つの山の名前。どの山を指すのかに関して違う説がある。その一つは「大庾」，「騎田」，「都龐」，「萌渚」，「越城」という5つの山を指す。㉟「粤」：広東省。

4．総論で捉えられた重要山系のまとめ

上の総論で論じられた山々を整理すると表1のようになる。また，地形図の上で示すと，図3のとおりになる。

5．結　　び

以上，明代の書物に記載された「総論中国之山」を通して，中国の歴史における「三大幹」の地形認識を考察した。その認識の元で捉えられた主要山系は現代の地図と合わせると，事実の地形に則したものであることは分かった。

中国の国土を「北龍」，「中龍」，「南龍」という三大カテゴリに分類し，各カテゴリにおいて山脈に一定の主次関係（主幹と分枝）をもたせていることは具体的に見ることができた。

時代の制約により，当時，中国以外の領域を含めた更なる広い範囲から地形を把握することができなかった点は，歴史的な地形認識に残された問題点である。しかし，限られた地理情報の中でも，

表1　「総論中国之山」に挙げられた山脈及びその関係

三大幹	触れられた主な支脈	備　　考
北幹 黄河以北	（寰武嵐憲）→［呂梁山］→［火焔山］（壺口）	恒山は「北岳」，「華山」は「西岳」，「嵩山」は「中岳」，「泰山」は「東岳」，「衡山」は「南岳」とも称され，この五山はいわゆる「五岳」である。
	〃　→［太岳山］→王屋・析城山→［中条山］（雷首）	
	〃　→恒山	
	〃　→太行山→燕山	
中幹 黄河と長江の間	（蜀漢）→［秦嶺］→華山（関中）	
	〃　→函谷→［熊耳山］→嵩山→泰山	
	〃　→嶓塚山→［大別山］（揚州）	
南幹 長江以南	岷山→衡山	
	〃　→五嶺→桂嶺→［羅霄山］→［九嶺山］→廬山	
	岷山→五嶺→［武夷山］→［懐玉山］→黄山→（建康） 〃　→［懐玉山］→天目山 〃　→［仙霞嶺］→会稽山	

注：（　）は原文に基づいた名称。［　］は原文に明記されていないが，文脈と地図からは読みとれる山。

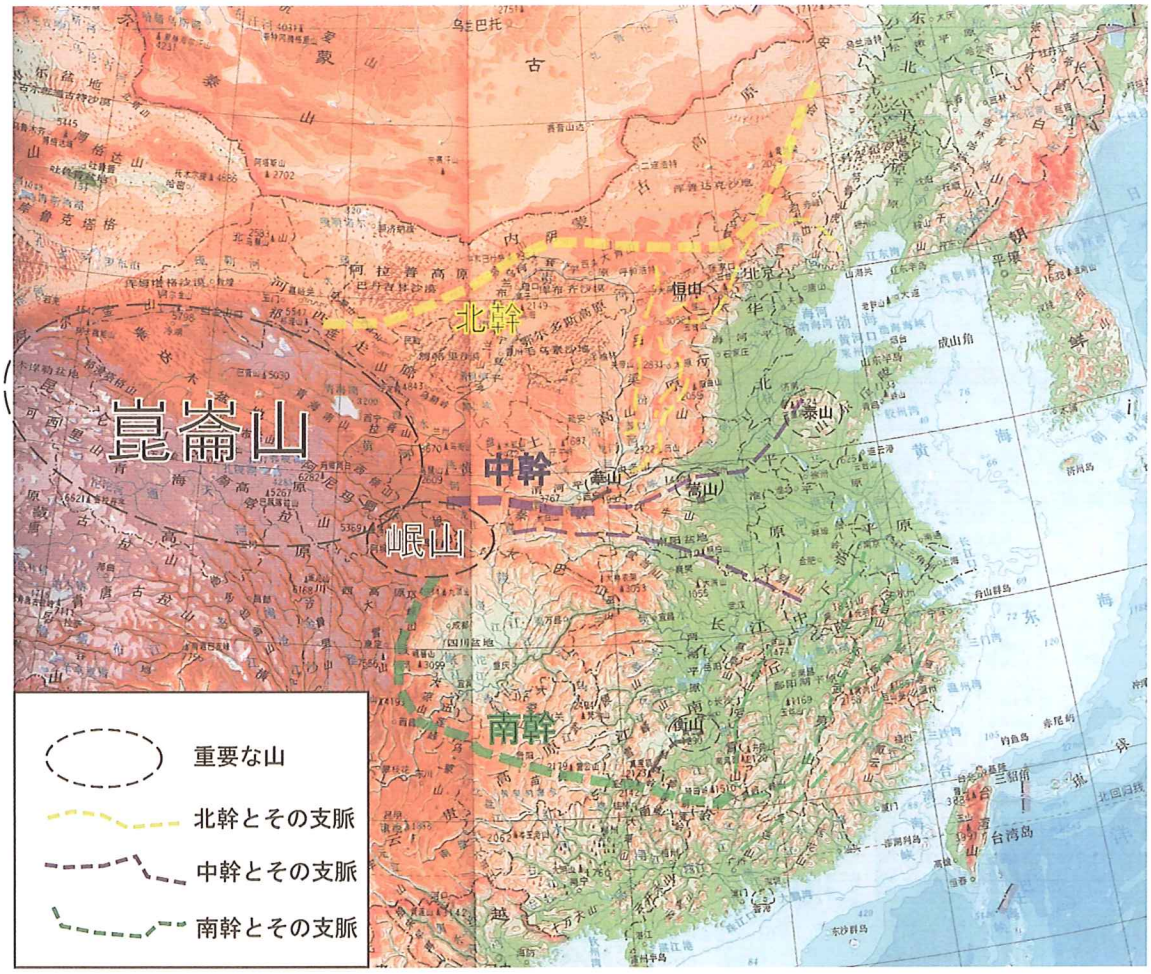


図３　三大幹とその支脈

黄河と長江が「三大幹」の間の境界線であるという認識が本考察から確認できた。

「三大幹」としての地理認識にどのような理由と利点があるのか。これを検証することは重要なポイントであり，今後の研究機会に更に深めたい。

注及び参考文献

(1) 王成組『中国地理学史』商務印書館　1982．12，pp.173

(2) 明・王圻，王思義『三才圖會』上海古籍出版社　1985．8，pp.518。この版は上海図書館が所蔵する明萬暦王思義校正本を元に影印したものである。『三才圖會』は上の版のほかに，「曽孫爾賓重校」と「潭濱黄晟東曙氏重校」などの版がある。後者はみな王思義校正の版を元としているという。

(3) 明・章潢『圖書編』上海古籍出版社　1992．3，pp.968。この版は文淵閣『四庫全書』を元に影印したものである。

(4) 明・徐善継，徐善述『地理人子須知』乾坤出版社，pp.26～30。

(5) 宋・李昉『太平御覧』中華書局出版　1995．10，pp.169，181。この版は上海涵芬楼が影印した宋代の版を元に復刻したものである。

(6) 範宜賓『乾坤法竅』武陵出版社　1987．2，pp.100，唐・楊筠松「撼龍経」。

参考辞書と地図：

・辞源修訂組『辞源』商務印書館出版　1988．7
・辞海編輯委員会『辞海』上海辞書出版社　1989．9
・中国地理叢書編輯委員会『中国綜合地図集』中国地図出版社　1990．12
・『中国地図』中国地図出版社　1995．1
・中国社会科学院，譚其驤『簡明中国歴史地図集』中国地図出版社　1991．10
・『宋本歴代地理指掌圖』上海古籍出版社　1989．11